英語　関係詞　詳説　（A4；4 頁）

関係代名詞

★ノーマルタイプの関係代名詞

◎関係代名詞とは　最重要

関係代名詞というのは、普通の文の中に出てくる名詞（これを先行詞という。）を、別の文で修飾（限定）する場合に使う語である。その「別の文」の中には、先行詞と同じ単語が出てきている。

◎一覧表　最重要

	主格	所有格	目的格
人	who	whose	who whom（かため）
物	which	whose	which
人・物	that	—	that

◎関係代名詞の使い方　最重要

例として、I'll give you the book.（私はその本をあなたにあげるつもりだ。）…A の the book を、I bought the book in Tokyo last year.（私は昨年東京でその本を買った。）…B という別の文で修飾する場合を考える。できあがった文の日本語訳は「私は、私が昨年東京で買った本を、あなたにあげるつもりだ。」となる。ここでは、A の内容を本当に伝えたいのであって、こちらの文を「主役文」とここでは呼ぶことにする。B の内容は、上の文の中の the book を修飾するために存在しているのであって、こちらの文を「脇役文」と呼ぶことにする。

以下の手順で、関係代名詞を用いて B を A にくっつけて、修飾する。

① まず、脇役文の中の、先行詞（＝主役文の中の修飾される名詞）と同じ名詞（ここでは the book）を関係代名詞に直す。関係代名詞は、それが人であるか物であるかによって変わるし、それが脇役文の中で何格かによって変わる。ここでは、the book は物であり、目的格（脇役文の中で、bought の目的語になっている。）であるので、which（that でもよい）を用いる。すると、脇役文は I bought which in Tokyo last year. となる。

② 次に、脇役文の中の関係代名詞を文頭に移す。すると、脇役文は Which I bought in Tokyo last year.となる。

③ 最後に、ピリオドを取った脇役文を、主役文の中の先行詞のすぐ後ろに挿入する。すると、I'll give you the book which I bought in Tokyo last year. となる。これで完成である。

※「主役文」「脇役文」という用語は、著者しか使っていない用語である。なお、関係詞を使って一文になった後は、主役文だった部分を「主節」といい、脇役文だった部分を「関係詞節」などという。

◎格について　重要

関係代名詞の格	脇役文の中でのはたらき
主格	①主語になっているとき。　②SVC（be 動詞の文など）の C になっているとき。
所有格	別の名詞を「～の」という意味で修飾しているとき。
目的格	①目的語になっているとき。　②前置詞の目的語になっているとき。

◎物の所有格について　余裕あれば

物の所有格は、「whose（＋名詞）」としてもいいが、前置詞 of を用いて「（名詞＋）of＋関係代名詞」としてもよい。

◎関係代名詞が省略可能な場合　最重要

(1) 目的格の関係代名詞は、省略することができる。

(2) 脇役文が I think (that) S' + V' …. の形の文の場合に、その S' を関係代名詞に直す場合には、主格だが、関係代名詞を省略することができる（なお、think の直後の that は省略）。think のほかに、know や believe などの場合も同様。

(3) be 動詞の補語として、あるいは There is S. の S として用いられている関係代名詞主格は、省略することができる。

◎who, whom, which よりも that が好まれる場合　重要

通常は、主格・目的格は、who, whom, which でも that でもよいが、that を用いることが好まれる場合というのがある。

(1) 先行詞が「人＋物」の場合

この場合、who, whom を用いるべきか、which を用いるべきか、よく分からないので、that が好まれる。

(2) 先行詞に、最上級の形容詞、序数詞、all, every, any, no, the same, the only, the very などの修飾語が付いている場合

ただしこの場合、先行詞が人の場合は、who を用いるのも普通である。

(3) 疑問代名詞 who が先行詞の場合（実際に出てくることはめったにない。）

◎文頭に出すときに別の語を道連れにする場合　重要

脇役文の中の関係代名詞を、脇役文の文頭へ出すときに、その関係代名詞にくっついている別の単語が、関係代名詞に道連れにされて文頭に出されることがある。

(1) 前置詞の目的語の場合

前置詞の目的語が関係代名詞になっている場合は、その前置詞を道連れにして文頭に出すことができる。道連れにするときには、whom と which のみ使用可で、who や that は使用不可で、省略も不可。

なお、道連れにしなくてもよい（道連れにしない場合は、どの関係代名詞も使用可で、省略も可）。

（例）　主役文：I like the house.（私はその家が好きだ。）

脇役文：She was born in the house.（彼女はその家で生まれた。）

できあがった文（私は彼女が生まれた家が好きだ。）：

○　I like the house in which she was born.　　×　I like the house in that she was born.

○　I like the house which[that] she was born in.

○　I like the house she was born in.　　×　I like the house in she was born.

(2) 所有格の場合

所有格の関係代名詞は、その所有格に修飾された名詞を必ず道連れにする。

（例）　主役文：I love the girl.（私はその女の子を愛している。）

脇役文：I met the girl's brother yesterday.（私はその女の子の弟に昨日会った。）

できあがった文：I love the girl whose brother I met yesterday.

（私は、私がその子の弟に昨日会ったところのその女の子を愛している。）

（＝私は、私が昨日会った男の子のお姉さんを愛している。）

(3) 「名詞＋前置詞＋関係代名詞」となっている場合（前置詞＋関係代名詞が名詞を修飾している場合）

「名詞＋前置詞＋関係代名詞」をセットで文頭に出すこともできる。

（例）I saw the house the roof of which is pink.（私は、屋根がピンク色の家を見た。）

◎継続用法　重要

ここまで述べてきた用法は、ある名詞を別の文で修飾することによって限定する用法であり、「限定用法」と呼ばれている。それに対して、以下の「継続用法」と呼ばれる用法がある。継続用法というのは、2 つの文があり、2 文目の中に 1 文目に出てくる名詞と同じ名詞がある場合に、関係代名詞を用いて一文にして楽をしようという用法である。基本的に作り方は限定用法と同じであるが、先行詞と関係詞節の間にカンマが入る。また、that を用いたり、関係代名詞を省略したりはできない。

和訳するときには、1 文目に当たる部分を訳し、and（そして）・but（しかし）・for（というのも～だから）のいずれかを補ってから、2 文目に当たる部分を訳す。

（例）I met her brother, who was very cool.（私は彼女の弟に会った。そして彼はとてもカッコよかった。）

（例）I met Mrs. Saito, whose son is a friend of my daughter. （私は斎藤夫人に会った。彼女の息子は私の娘の友人だ。）

また、先行詞が一語ではなく、句や節全体であることもある。

（例）She said her mother was dead, which was a lie.（彼女は彼女の母は亡くなっていると言ったが、それは嘘だった。）

また、メインの文の途中に、補足説明の文を入れるときに、継続用法が使われる場合もある。

（例）My English teacher, who was born in England, loves yakisoba.

（私の英語の先生は、その人はイングランド出身なのだが、焼きそばを愛している。）

なお、「限定用法」は「制限用法」とも呼び、「継続用法」は「非制限用法」とも呼ぶ。

★複合関係代名詞 what　最重要

what は、「the thing which」または「the things which」を一語で表したものである（ここでの which は関係代名詞の主格または目的格）。つまり、先行詞（the thing[things]）と関係代名詞（which）を一語で表している。その意味で、複合関係代名詞と呼ばれる。

（例）Show me what you bought yesterday.（あなたが昨日買ったものを見せなさい。）

（＝Show me the things which you bought yesterday.）

まれに、what が「the person who」の意味で使われる（つまり、物でなく、人について使われる）こともある。

★関係代名詞 but　余裕あれば

古い用法である。めったに使われない。

but は、ノーマルタイプの関係代名詞の主格・目的格と同じ働きをし、さらに関係詞節の中を否定文にする役割を果たす。

（例）There is nobody but has faults.　（＝There is nobody who doesn't have faults.）（欠点を持たない人はいない。）

★擬似関係代名詞 as　余裕あれば

◎限定用法―――関係代名詞として、以下の形で用いる。

(1)「such 名詞 as 関係詞節」―――「…するような～」

（例）It was such a story as I have never heard.（それは私が聞いたこともないような話だった。）

(2)「the same 名詞 as 関係詞節」―――「…するのと同じ～」

（例）She was reading the same book as I was reading.（彼女は私が読んでいたのと同じ本を読んでいた。）

(3)「as 形容詞 名詞 as 関係詞節」―――「…するのと同じくらい～」

（例）I want as many books as you have.（私はあなたが持っているのと同じくらい多くの本が欲しい。）

なお、目的格の場合は省略可能。

◎継続用法―――主節の全体や一部分を先行詞とし、「～だが」（補足説明）の意。

（例）He was from Kyoto, as I knew from his accent.（彼は京都出身だった、私は彼の訛りからそれが分かったのだが。）

関係節が主節の前に来ることもある。

（例）As is usual with him, he didn't come in time this morning.

（それは彼にはいつものことだが、けさ彼は時間までに来なかった。）

★擬似関係代名詞 than　余裕あれば

「～よりも」の意で、（主節内の）比較級とともに使用される。単なる前置詞や接続詞の場合もあるが、関係代名詞として用いられる場合もある。

（例）They sent me more apples than I ordered.（彼らは私が注文したのより多くのリンゴを私に送ってきた。）

★whoever, whichever, whatever　重要

◎複合関係代名詞としての用法

・whoever = anybody who（～する人はだれでも）

（例）I like whoever gives me chocolate.（私は、私にチョコレートをくれる人はだれでも好きだ。）

・whichever = any one that（～するものはどれでも）

・whatever = anything that（～するものは何でも）

◎副詞節をつくる用法（譲歩）　・・・副詞節の中では代名詞としての役割を果たすが、主節には影響を与えない。

・whoever（だれが[を]～したとしても）

（例）Whoever comes here, don't talk with him or her.（だれがここに来ても、その人とは話すな。）

・whichever（どれが[を]～したとしても）

・whatever（何が[を]～したとしても）

（例）Whatever happens, I have to write this letter.（何が起こっても、私はこの手紙を書かねばならない。）

なお、whoever ＝ no matter who 、whichever ＝ no matter which 、whatever ＝ no matter what と書くこともできる。

関係形容詞

★関係形容詞 which　余裕あれば

継続用法で用いられることがある。詳細は省く。

（例）He may come here, in which case I'll give him this book.

（彼がここに来るかもしれない、その場合には私はこの本を彼にあげよう。）

★複合関係形容詞 whichever・whatever　余裕あれば

詳細は省く。　（例）You can borrow whichever books you want to read.（読みたい本はどれでも借りることができる。）

関係副詞

★ノーマルタイプの関係副詞 when・where・why・how

◎基本的な用法　最重要

「関係副詞」とは、「前置詞＋関係代名詞」を一語で表したものである。

when・・・先行詞が時を表す名詞のときに用いる。（＝in which, at which, on which など）

where・・・先行詞が場所を表す名詞のときに用いる。（＝in which, at which, on which など）

why・・・先行詞が理由を表す名詞（reason, cause）のときに用いる。（＝for which）

how・・・先行詞が the way のときに用いる。（＝in which）

（例）Please tell me the day when he will arrive.（彼が到着する日を教えてください。）

（＝Please tell me the day on which he will arrive.）

I'll visit the house where she was born.（私は彼女が生まれた家を訪ねるつもりだ。）

（＝I'll visit the house in which she was born.）

I don't know the reason why she was absent yesterday.（私は彼女が昨日欠席だった理由を知らない。）

（＝I don't know the reason for which she was absent yesterday.）

◎関係副詞や先行詞の省略　重要

関係副詞は、省略することもできる。

また、関係副詞が省略されない場合、先行詞が以下の場合には、先行詞を省略することができる（複合関係副詞となる）。

(1) 関係副詞 when の先行詞が the time の場合　(2) 関係副詞 where の先行詞が the place の場合

(3) 関係副詞 why の先行詞が the reason の場合　(4) 関係副詞 how の先行詞が the way の場合

但し the way how という形を用いてはならず、the way（先行詞）か how（関係副詞）のどちらかを必ず省略する。

◎限定用法と継続用法　重要

関係代名詞と同じく、関係副詞にも限定用法のほかに、継続用法がある。

★whenever, wherever, however　余裕あれば

◎複合関係副詞としての用法

・whenever = at any time when（～するときはいつでも）

（例）I'll cook you dinner whenever you come to my house.

（あなたが私の家に来るときはいつでも、あなたに夕食を作ってあげよう。）

・wherever = at[in, to など] any place where（～するところはどこへ[で]でも）

（例）I'll go wherever they give a concert.　（私は彼らが演奏会を開くところへはどこへでも行こう。）

◎副詞節をつくる用法（譲歩）

・whenever（いつ～したとしても）

・wherever（どこで～したとしても）

・however（どれほど[どんなふうに]～したとしても）

なお、whenever ＝ no matter when 、wherever ＝ no matter where 、however ＝ no matter how と書くこともできる。

※複合関係副詞としての用法と、副詞節をつくる用法は、意味にほとんど差がない場合もある。